

ドッジボールのうんちく

(1) ドッジボールの「ドッジ」とは

小学生ならどこの学校でも行われるボール運動と言えばドッジボール。これほど、よく行われ、小学生に愛されているボールゲームは、ほかにはないでしょう。それなのに、中学生になると全くされないのも不思議です。

さて、この「ドッジボール」は、英語で書くと「dodgeball」となり「dodge（ドッジ）」の意味は、「ひらりと身をかわす」で、攻めきの人から、身をかわしてよけるということ、ゲームの中の一つの動きを指しています。今でも学校で、「ドッチボール」と書かれているのをよく見ますが、「ドッチ」なら英語のつづりは他のものになるので、これはまちがいです。

この「ドッジ」という言葉は、他のスポーツでも使われています。バスケットボール、ホッケー、サッカー、ラグビー、アメリカンフットボールなど、ゴールがある球技で使われる言葉です。しかし、これらのスポーツでは「身をかわす」という意味ではなく、相手のプレイヤーの所で急に向きを変える動きや、急に向きを変えることを指す言葉として使われています。ドッジボールの「ドッジ」は守りの動きを指しているのに対して、他のスポーツでは、攻めきの動きを指しているというちがひがあります。

(2) ドッジボールのおこり

ドッジボールがどこで、どうやって生まれたのかは、実はよくわかりません。と言うのも、円になって中にいる人を当てるという遊びは、世界各地で行われていたからなのです。それが、明治の終わりから大正のはじめにかけて、日本に紹介されたということは確かなようです。

日本では、円形ドッジボールや方形ドッジボールなど、一つのボールゲームとして行われ、「ドッチボール」と書かれていたのです。記録に残っている古いものとして、1909年（明治42年）に小学児童のボール運動として、ドッジボールが紹介されています。1912年（明治45年）には、サークルドッジボール、ダブルドッジボール、プログレーシブドッジボールなど、いろいろな形のドッジボールが紹介されています。つまり、ドッジボールは、明治政府が外国を視察し、持ち帰ってきたボール遊びが、何らかの形で日本の中で、高めら

れ、今日のドッジボールに発展していったと考えることができます。

(3) デッドボールからドッジボールへ

しかし、ややこしい話ですが、このドッジボールは、明治～大正期当時にあったデッドボールというボールゲームの中の一つのゲームとして紹介されて広まっています。

デッドボールとは、教室で行う遊びで、大きいゴムの球や紙風船などを数個使って、座席にいる児童がその球を打ちます。打ちそじた人が「デッド」になるという遊びでした。

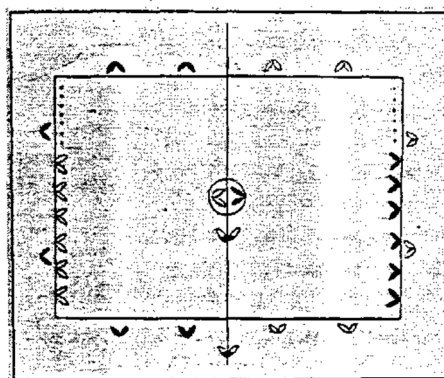
ですから、ドッジボールとは全くちがった遊びだったのです。しかし、それに関わらず、デッドボールと呼ばれて、広まっていったのです。このころのデッドボール（今のドッジボール）は、円形でしたが、やがて、方形デッドボールが現れ、方形デッドボールの方が広まっています。円形デッドボールでは、中にいる人はボールを受けることができず、当てられるのみだったのに対し、方形デッドボールでは、ボールを受け取ってもよいとされていたからです。この新しいルールにより、全国的にデッドボールが広まって行きます。（今のドッジボールとほぼいっしょのルール）

1926年（大正15年）「デッドボール」という呼び方を、「ドッジボール」に変更されます。これは「デッド」という言葉が「死」を意味することをきらったためでした。そして、「ドッジ」（ひらりと身をかわす）を用いることになったのです。

この後、戦争があった時代に、ドッジボールなどの外来語の使用が禁止となることにともない、1936年には「^{ひきゅう}避球」、1943年に「^{とうひきゅう}投避球」と漢字で表されますが、戦後は、再び、ドッジボールとカタカナを使いようになります。



円形ドッジボール（昭和5年）。



方形ドッジボール（昭和5年）。